説林

「回回館譯語」語釋（一）

田坂興道

一　序論——「回回館譯語」解題と語釋の方針（以上本號）
二　語釋
1 天文門　7 宮室門　13 珍寶門
2 地理門　8 鳥獸門　14 顏色門
3 時令門　9 花木門　15 文史門
4 人物門　10 器用門　16 方隅門
5 人事門　11 衣服門　17 數目門
6 身體門　12 飲食門　18 通用門
三　結論——語釋より得たる若干の注意すべき事項
附　索引

一　序論——「回回館譯語」解題と語釋の方針

1

本稿はいはゆる「華夷譯語」中の一篇として存する「回回館譯語」に收められてある語句の解釋を試み、それを通して、出來得べくんば、この譯語に介在すべきその時代の歷史的事象を觀察し、もしくはもつと廣い範圍の史的現象の考察に對する暗示を得んとして筆をおこしたものである。

さて「華夷譯語」そのものに關する書誌學的解說

については、既に羽田博士[1]・神田[2]・石田[3]兩教授及び小倉博士[4]等の論文があり、歐洲に於けるこの種譯語の所藏狀態に關しては E. Denison Ross 氏の報告[5]があり、殊に石田教授の論文は「華夷譯語」全般に對する解說としてはもつとも詳細をきはめたものであつて、この書の樣相に關してはいまさら私の述べる必要はないと思ふが、一には本稿行論の順序として、二には讀者諸賢に前記諸論文を繙讀させる勞を省くために、主として石田教授の所說をかりて簡單に說明をしておくこととする。

石田教授の說[6]によると、「華夷譯語」には凡そ次のごとき三種類のものがあるといれれる。

(甲)明の洪武十五年(西紀一三八二)太祖洪武帝の勅を奉じて翰林侍講火原潔・同編修馬沙亦黑等が編纂し、同二十二年(西紀一三八九)十月十五日附翰林學士劉三吾の序を附してこの年鋟板頒行せられた「華夷譯語」。

(乙)明の永樂五年(西紀一四〇七)、はじめて四夷館が置かれてより以來、この館に於て館員の必要上編述せられ、清の順治元年(西紀一六四四)四夷館が四譯館と名を改め、清朝に引繼がれた後にも引續いて改削增損を加へられて幾種かの別本を有する「華夷譯語」。

(丙)明末茅瑞徵(伯符)の所輯と稱せられ、卷首に朱之蕃の序を附した(さうしてマスペロ博士に從へば、會同館の館員が習つた諸國の語を錄したのではないかと思はれる)「華夷譯語」。

しからば「回回館譯語」はこれら三種のうちのいづれの華夷譯語に含まれてゐるであらうか。

註

1 羽田博士「四譯館則」(常務帝國大學重刊國)解題(昭和二年十二月)及び同博士「華夷譯語の編者馬沙亦黑」(大正六年東洋學報第七卷第三號)

2 神田喜一郎教授「明の四夷館に就いて」(昭和二年史林第十二卷第四號)

3 石田幹之助教授「女眞語研究の新資料」(昭和六年桑原博士還曆記念東洋史論叢)

4 小倉博士「朝鮮館譯語」語釋「昭和十六年東洋學報第二十八卷

第三號）

5 E. Denison Ross; New light on the history of the Chinese Oriental College, and a 16th century Vocabulary of the Luchuan language. (T'oung Pao. Sér. II. Vol. IX, 1908.)

なほ小倉博士論文（上掲書頁三六二註4）參照。

6 石田教授上掲論文（上掲書頁一二七七）參照。

2

石田教授の解說によれば、[5] 右の三種の華夷譯語のうち、（甲）は一切胡字を使用せず、胡語を寫すに漢字を以てし、しかも蒙古（韃靼）一國語のみをしるしたもので、「華蒙譯語」乃至「華韃譯語」と稱して差支なきものであり、したがつて（甲）には「回回館譯語」は含まれてゐない。（乙）種は四夷館乃至四譯館に於ける各館（例へば韃靼館・女眞館・西番館といふ樣な）の改廢に伴つて各本それぞれその內容を異にしたものらしいが――卽ちその含む所の外國語の種目を異にしたものらしいが、要するに數種の外國語の胡漢對譯語彙と「來文」と稱する各外國より支那の朝廷へ上れる表文の胡漢對譯冊とよりなり、語彙の部に於て外國語は之を漢字を以て音譯すると同時に當該外國文字を以ても之をかきあらはし、之に併記するに漢譯を以てしたものであり、「來文」の部に於ては胡漢兩文を兩々相對照せしめたもので、この種の譯語には版本・鈔本の二種があるけれども、これらの完本の世に傳はるものは寥々曉天の星の如くであるといふ。この種のものには左のごときものがある。（1）伯林國立圖書館所藏鈔本、Hirth 博士の將來に係り語彙と文例とを具備する明代の寫本二十四冊、その第六冊及び第十二冊が回回館譯語（Arabo-Persian）である。[6]（2）柯劭忞氏所藏明鈔本、（3）東洋文庫所藏明鈔本、ともに語彙と文例とよりなるが、前者は余のまだ目睹せざるものなるも、回回館譯語は存せざるものゝごとく、後者には完備してゐる。（4）內閣文庫所藏鈔本「西域同文表」は語彙の部を缺き來文のみ存するもの、これの

回回館表文と東洋文庫本の「來文」との差異に就いては次節でのべる。(4)英國ケンブリッヂ大學圖書館所藏 Wade Collection 中の「譯字」と稱する一鈔本。Giles 氏はその語彙中に Arabic の語彙があると告げてゐるが、[3] Arabic とは回回館譯語であることは疑ない。この一書の詳細な書誌的說明はまだなされてゐないが、おそらく語彙のみで來文はないと思はれる。(6)故內藤博士所藏本、これに關しては石田敎授も確實な說明をなされて居らず、回回館譯語が存するや否やも未詳である。(7)巴里國民圖書館本(清代鈔本)、Amiot 神父が北京より將來したもので語彙と文例とよりなる。これには回回館譯語は存してゐると思ふ。[4] (8)巴里アジヤ協會本(清康熙年間鈔本)、これは石田敎授の調査に從へば(7)の文例を缺くもので、わが國にも數部の寫眞複本があるといはれるが、余はまだ寡見にして實際に見たことはない。[補註] (9) Edkins 氏舊藏現大英博物館藏本、これは Douglas 氏によれば、[5] 不完本で語彙のみよりなる六ヶ國語で、その一に回回語がある。(10)京大・東洋文庫・Edkins 舊藏別本・神田敎授所藏本、これらは清刊本の西番・暹羅二國語のみの譯語とはれる。因みに陸次雲の譯史紀餘(龍威秘書本)[6]には回回以下七種の國語の語彙があり、系統的には乙種本に屬するが、回回語は四〇語のみにすぎぬ。但しこれは勿論華夷譯語の一異本として數へるべきではない。

以上から回回館譯語のみに關して十分なる說明を行ふことは難いが、右の中、語彙と文例、又はそのいづれかを含むものとしては、(1)・(3)・(4)(來文のみ)・(5)(語彙のみ)・(7)~(8)(語彙のみ)・(9)(語彙のみ)の七本を數へることが出來る。このほかなほ、著錄されて世に傳つてゐるものがあるが、それに就いては出敎授や Pelliot 氏の說明に讓つてここでは說明を省く。いづれにせよ、以上の諸本は、石田敎授に從へば、いづれも完本ではない樣である。Hirth 氏

の說明によると、伯林本が他本よりも完全な樣である[8]が、すでに石田敎授も指摘された樣に、少くとも女眞語の部分に於ては東洋文庫本に劣つてゐるのである。

（丙）種は（乙）種とは反對に外國語を寫すに一切漢字の音のみを以てし、少しも外國字を加へず、各行の上部に漢語を揭げ、その下に之が對譯を漢字音を以て示してゐる。石田敎授に從ふと、この種のものには所謂「來文」の部を缺き、また鈔本のみで、版本として世に傳へられてゐるものは絕無である。而してこの種に屬するものは、（1）倫敦大學圖書館所藏 R. Morrison Collection に存する明鈔本と覺しきもの、（2）近藤守重の目睹してその「正齋書籍考」に著錄したもの、（3）松澤老泉がその「彙刻書目外集」に著錄したもの、（4）佛印 Hanoi の佛國遠東學院に現藏されるもの、（5）故稻葉博士祕藏の一本（これから京大本・內藤博士本等の副本が作られた）[補註]、（6）水戶彰考館所藏本、（7）淸の王聞遠の「孝慈堂書目」に見える十國譯語と稱するもの、（8）靜嘉堂文庫所藏本、（9）德島市阿波國文庫所藏本の九本があるが、そのうち現存本で完帙と思はれるのは、（4）の Hanoi 本と（9）の阿波國文庫本とであるといふ。而してこれらには原則としては、朝鮮・琉球・日本・安南・占城・暹羅・韃靼・畏兀兒・西番・回回・滿剌加・女眞（女直）・百夷の十三種の言語が收錄されてある筈であるが、（4）（9）以外の諸本は悉くこれを完備してゐるものではない。當面の回回館譯語にしても、（6）水戶彰考館本及び（7）孝慈堂書目本は之を缺いて居り、（2）正齋目睹本や（3）彙刻書目外集所載本は今日その存否は不明である。從つて今日利用し得るものは、（1）ロンドン本、（4）ハノイ本、（5）稻葉氏本[補註]、（8）靜嘉堂本、（9）阿波國本の五種に過ぎない。

なほ特に記しておきたい一本がある。それは石田

教授の解題中に洩れてゐるかと思はれる一聯の華夷譯語の異本で、廣東駐在のイタリヤ領事 Giuseppe Ros 氏の所藏に係るものであり、それには高昌・百譯・八百・西番・回回・緬甸・西天・暹羅の八國語が含まれてゐる。この異本の存在は恩師和田博士の教示によつてはじめてこれを知つた次第で、深謝に堪へぬところである。內容は未詳であるが、恐らく本書は(乙)種に屬する清代の鈔本であらう。

註

1 本章は石田教授の上揭論文(上揭書頁一二七七—一二八八)による所が多かつた。誌して深く感謝する次第である。

2 F. Hirth; The Chinese Oriental College. (Jour. of N. C. R. A. S., 1887, p. 213.)

3 H. A. Giles; A Catalogue of the Wade Collection of Chinese and Manchu books in the Library of the University of Cambridge, Cambridge, 1898, p. 147.

4 Hirth 氏によれば同一寫本の不完本二種がロシヤのレニングラードにあるといふ(Hirth 氏上揭論文及び E. D. Ross 氏上揭論文頁六九一)。

5 R. K. Douglas; Supplementary Catalogue of Chinese books and manuscripts in the British Museum, London. 1903, p. 49. 氏はこの華夷譯語を目して西紀一七〇〇年?としてゐる。しかし Pelliot 氏によると明代の刊本であるといふ(J. A. jui-août. 1914, p. 184. 石田教授、上揭書頁一二八五附註參照)。一七〇〇年ならば清の康熙三十九年にあたる。

6 石田教授上揭書頁一二八二參照。譯史紀餘には回回・百譯(百寮)・高昌・緬甸・八百・韃靼・天竺の各國書が含まれ、西番譯語はその名をもつて別に二卷とせられてゐる。なほ八紘譯史中には回回譯語は存しない。

7 石田教授上揭書頁一二八四・八五・八六、Pelliot 氏上揭書頁一八〇—一八二。

9 F. Hirth; ibid. (ibid. p. 212.)

3

上述のごとき十三種の言語を包含してゐる華夷譯語は、言語研究、特に明代の言語の研究上極めて重要な價値を有してゐるために、すでに各言語の方面からその研究が進められて行つた。その研究の狀態はすでに淺井惠倫[1]氏及び小倉博士[2]によつて詳しく說かれてあるので、本稿では、右二氏の調査を參考と

し、單に論文のリストを註記しておくにとゞめた。[3]
即ちこれら從來の研究を一瞥するに十三種の譯語のうち、幾分でもその內容が紹介せられ、また語釋が試みられたものは、琉球・日本・安南・占城・畏兀兒・滿剌加・女眞・百夷及び朝鮮の九種に及んでゐる。就中、小倉博士の執筆された「朝鮮館譯語」語釋は、華夷譯語研究史上に於ける一偉觀であると申しても決して過言ではない。

以上のごとき研究の成果に照して見ると、今日まだその內容の研究が學界に發表されてゐないのは暹羅・韃靼・西番・回回の四種の譯語である。もつともこのうち、當面の回回館譯語に關しては、すでに西紀一九〇八年(明治四十一年)英國の人 E. D. Ross 氏[4]が、「余は波斯(回回)語・トルコ(畏兀兒)語及び琉球語に對し細心なる檢討をなし來つた」といひ、また、「余はこの寫本に含まれてゐる語彙を、よしや全部ではなくとも、その中のあるものを漸を逐うて公刊しようと思ふ。現に余はトルコ語及びペルシャ語のリストの公刊の準備を果して居り、而して今や、琉球語の研究途上にある」と通報誌上で公約したことがあるけれども、爾後、年を閱することこゝに三十五星霜にして、なほ吾人はその業績の公表されたるや否やを知らないのである。私はたまたま支那回教史研究に携つてゐる關係から、回回館譯語には夙にいたく興味を抱き、言語專攻の學者のこれに關する研究を待望してゐたのであるが、自らもまた研究を進めきたつた。そのことは、昭和十六年十二月東洋史談話會の席上で口演し、本年四・五月號の史學雜誌に連載された拙稿「東漸せるイスラム文化の一側面に就いて」の中に於て言及し、かつこの論稿の行論中に回回館譯語の語彙を幾多引用した關係上、不日これに關する試論を提出すべく約束しておいたところである。[5] ここに敢て本稿を公にしたのは、この約束をはたすとともに、華夷譯語研究史上の一つの缺

陷を補ふことが出來れば幸であり、かつ之に依つて回教史學・言語學專攻の士の教示に與りたいと念願したからにほかならない。

註

1 淺井惠倫氏「校本日本譯語」(安藤教授遐曆祝賀記念論文集)、昭和十五年。

2 小倉博士上揭論文、特にその第三章の本文及びその註(東洋學報第二十八卷)頁三六四—三六八。

3 日本館譯語に關するものには伊波普猷氏「日本館譯語を紹介す」(方言卷二ノ九及び南島方言史攷、昭和九年)、なほ伊波氏には「語音飜譯釋疑」(金澤博士遐曆記念東洋語學の研究所收)がある。秋山謙藏氏「明代に於ける支那人の日本語研究」(國語と國文學卷十ノ一)。淺井惠倫氏「校本日本譯語」(安藤教授遐曆祝賀記念論文集、昭和十五年)等がある。

安南語に關しては近藤守重「安南紀略藁」中に「安南譯語」(守重日記所載)がある。女眞語に關するものは前記石田教授の「女眞語研究の新資料」のほか、渡部薰太郎氏「女眞館來文通解」(亞細亞研究第十一號、昭和八年十月)、同氏「女眞語の新研究」(亞細亞研究第十二號、昭和十年一月)、及び Grube, W.; Die Sprache und Schrift der Jučen. (Leipzig, 1896) がある。後者は伯林本の乙種女眞館譯語に關する研究である。琉球語に關しては E. Denison Ross; New light on the history of the Chinese Oriental College, and a 16th century Vocabulary of the Luchuan language. T. P. Sér. II. 190, p. 689-695,)、占城語に關しては Ross 氏が右の行論中に言及してゐるほか、淺井惠倫氏上揭論文及び E. D. Edwards & C. O. Blagden; a Chinese Vocabulary of Cham Words and Phrases. (Bulletin of the School of Oriental Studies. 1939, Vol. X, Part I, p. 53-91,)がある。滿剌加語に關しては同じく E. D. Edwards & C. O. Blagden; A Chinese Vocabulary of Mallaca Malay Words and Phrases collected between A. D. 1403 and 1511(?). (Bulletin of the School of Oriental Studies, Vol. 1931, VI, Part 3, p. 715-749,)、淺井氏上揭論文及び泉井久之助氏(言語研究第五卷、昭和十五年五月、新刊紹介欄)があり、百夷語に關しては山本達郎氏「華夷譯語に見えたる百夷及び八百の文字」(東方學報東京第六册、昭和十一年二月)があり、長兀兒語に關しては J. Klaproth; Abhandlung über die Sprache und Schrift der Uiguren, 1822. がある。最後に朝鮮語に關しては上述のごとく小倉進平博士「朝鮮館譯語語釋(東洋學報第二十八卷第三・四號昭和十六年八・十二月)がある。これらの諸篇中には小倉博士のごとき精細な語釋を施されたものもあるが、なかにはまだ語彙の解說には及ばず、單に概觀を加へたのみのものも存してゐる。

4 E. D. Ross; New light on the history of the Chinese Oriental College, and a 16th century Vocabulary of the Luchuan language, T. P., 1908, p. 689-695)

5 拙稿「回回館譯語」に關する覺書（回教圈七ノ五）參照。

4

華夷譯語十三種のうち、例へば日本館譯語は日本との「朝鮮館譯語」は朝鮮との交通上にのみ必要性が存したことは疑ないが、ひとり回回館譯語はさうした小範圍の地域との交通ではなく、極めて廣い範圍の國々との交渉の上に利用されたと思はれるので、その間の事情を、語釋に入るに先立つて一言のべておく必要がある樣に思ふ。

四夷館の一としての回回館は、他の七館卽ち韃靼・女直・西番・西天・回回・百夷・高昌・緬甸とともに、明の永樂五年（西紀一四〇七）に設けられた。これらの四夷館及びその後增設された八百館・暹羅館等の沿革及び內情等については、すでに神田敎授の「明の四夷館に就いて」（史林第十二卷四號）に詳しく述べられてあるので、今日それに關する記述は必要でない。

さて回回館を通じて明の朝廷と交渉を行つた國々はいかなるものであつたかは、前述乙種華夷譯語に屬する回回館譯語の所謂「來文」の部によつてその一班を窺ひ知ることができよう。卽ちこの「來文」に收められたものは、いづれも回回館を經て諸外國から上つた表文の一部をそのまゝ範例として採つたのに相違ないから、それによつて回回文によつて朝貢した國國の範圍を知る便宜を得ることができる。いま東洋文庫本回回館來文を檢べると、總數三十の表文中、重複してゐると認められるものを整理すると、二十三通が實數であり、また同じ系統の內閣文庫本西域同文表回回館表文をみるに、總數十七通の表文中、重複せるものを整理すると、實數は十六通となる。次に回回館表文と回回館來文とを比較してみると、これらのうち重複せるものは十二通（「來文」側は十

六通「表文」側は十三通であるが、それらの中でも前者には四通、後者には一通の重複がある）を數へるから、兩者を合すると、實際的な眞實の數として二十七通を得ることができる。いかなる狀態で重複してゐるかは註記したところを參照されたい。[1]

しからばこの二十七通の表文をば國別に分けてみるとどうであらうか。まづ支那に最も近い哈密（Qāmil）から七通、土魯番（Turufān）から六通、撒馬兒罕（Samarqand）から七通、白勒黒（Balkh）白思勒（Basrah）、敵米石（Dimishq）、密思兒（Misr, エジプト）から各一通、天方（Mamlakat Ka'bah, メッカ、廣義にはアラビヤを指すが、ここではさうではあるまい）から三通上られてゐる。即ちこれによると、東はトルキスタンの東端なる哈密より、西は密思兒即ちアフリカ北部のエジプトに及ぶ廣範圍の地域内にある國國が含まれて居る。もつとも、哈密・土魯番のごときは他の言語すなはち高昌館の東トルコ（畏兀兒）方語にもよつて、ゐることが、高昌館來文によつて知られる。いま東洋文庫本の高昌館來文をしらべると、その十五通中、明側より發した二通の通牒文をのぞき、のこり十三通は、哈密よりの八通、土魯番よりの三通及び火州よりの二通となつてゐる。この畏兀兒語即ち高昌館用語は、ウイグリスタン所在のこれらの國國の固有語であつた筈である。

以上によつて、少くとも陸路によるアジヤ大陸東西交渉の上に於て、回回館の關係した地域は非常に廣汎であることがわかつた。これは實に他の十二種の譯館に全く類似を見ない現象であつて、回回館の用語、即ち後にのべる樣にペルシヤ語の國際的性格を窺ふ好個の史實と見ることができる。而して屢々云はれてゐる樣な、イスラム世界におけるアラビヤ語の普遍性といふことは、こと支那との交渉に關する限り、全然見ることが出來ないのであつて、そのことは上述のごとくアラビヤ語圈内に於ける天方・敵米石・密思兒等すらもペルシヤ語によらずして

は、支那との交渉をなすを得なかつたことから明かにされるのである。

勿論これはアラビヤ語專門の譯館をば明當局が設けなかつたためでもあるが、しかし、イスラム世界の諸國との交渉のための目的に於て、ペルシヤ語を掌る回回館を設けたところに、ペルシヤ語の國際性が、元時代のみならずその後も——元時代以前もさうであつた——依然として失はれなかつたことを證して餘りがあるのである。

かやうな次第で、上に記した回回館來文及び表文に見える諸國のみならず、廣く回教諸國が回回館に依存したことは疑ないが、もつと具體的に明朝に對する回教世界の諸國の入貢の狀態をしらべて見よう。この詳しい考察のためには、優に一長篇の論文を必要とするが、それは後日に讓つて、いまは單に皇明實錄を繙いて洪武初(西紀一三六八)から天啓末(西紀一六二七)までの明代の殆ど全期間を通じて、トルキスタン・ペルシヤ・アラビヤの各地方からの入貢數のみを調べた結果を報告するに止めておかう。この數は概數と理解されたく、細部に就いてはなほ記事の選擇に取捨を必要とする部分がないではないのである。その勞作は將來に殘しておかう。

哈密(Qāmil)	一九〇回
土魯番(Turufān)	一〇一回
撒馬兒罕(Samarqand)	八七回
亦里把里(Ilibāligh)	三一回
天方(Mamlakat Ka'bah)	二三回
哈烈(黑樓)(Harāt)	一六回
魯迷(Rūmī)	一四回
別失八里(Beshbāligh)	一二回
哈剌火州(Khārā khojo)	一二回
八答黑商(Badakhshān)	七回
柳城(魯陳)	五回
哈實哈兒(Kāshghar)	五回

亦思弗罕（Isfahān）　五回
忽魯謨斯（Hurmuz）　五回
失剌思（Shirāz）　五回
于闐（Khutan）　四回
坤城（Qum ?）　三回
乞兒麻（蠻、馬尼）（Kirmān）　三回
賽藍（Sairam）　三回
祖法兒（Zafār）　三回
阿丹（'Adan）　三回
密思兒（Misr）　二回
白葛達（Bāghdād）　一回

（以下省略）

右のほか一回入貢のものは數多あり、また單に西域回回とのみ記したものも五回あり、また前記來文及び表文に見えたる白勒黑・敵米石・白思勒等は、寡見によれば、實錄にはその入貢のことが見えぬやうであるから、實錄中にも記載もれがあると思はれる。それはともかく、右のごとき西域主要諸國——ウイグリスタンの諸都市の場合は上述のごとく高昌館によつた場合もあつたであらうが——はいづれも主として回回館を通じて通好したことは略〻疑ないであらう。

回回館はひとり上述のごときトルキスタン・ペルシャ・アラビヤ方面の諸國のためのみならず、南のかた海道諸國の通好の際にも、役立つてゐた證據がある。神田教授の引用された(2)、靳貴の「暫留遠人敎習以便審譯事疏」の中に、

據提督四夷館太常寺卿沈冬魁等呈、該回回館敎習主簿王祥等呈、切照、本譯專一譯寫回回字、凡遇海中諸國如占城暹羅等處進貢來文、亦附本館帶譯、但各國土語土字、與回回不同、審譯之際、全憑通事講說、乃至降勅回賜等項、但用回回字、云々。

とあつて占城・暹羅等の海道より入明したものの來

文もまた回回館に依つて譯上されたことがわかる。神田教授によると、[3] この、奏議は正德十年（西紀一五一五）に於けるものゝごとくであるから、この時代には、南方關係の譯館としては、永樂五年（西紀一四〇七）におかれた西天・百夷・緬甸三館と、正德六年（西紀一五一一）に增設された八百館と合せて、四館があつた筈であるのに、占城・暹羅等はこれによらなかつたのである。（暹羅館の設置は萬曆七年）。かかる例に徵すると、少くとも、明一代を通じて屢〻入貢したアフリカ東海岸の諸國のごときは、疑もなく回回館を通じたものに相違ないのである。またもし回教といふ紐帶を考へると、それの弘通してゐた南アジヤの諸地方が、上述のごとく南亞關係の譯館が三館乃至五館あつたにも拘らず、或はこれらをさしおいて回回館に詣つたかも知れない。康熙・乾隆の儒者杭世駿が、その景教續考（道古堂文集卷二五）において回回館のことに言及して、

而其隸在四譯館者、回回、特爲八館之首、問之則云、書兼篆楷草、西洋若土魯番・天方・撒馬兒罕・占城・日本・眞臘・爪哇・滿剌加諸國、皆用之。

と述べてゐる中に、假令幾分誇張の意が含まれてゐるとしても、以上の樣に考へて來ると、回回館の分擔する地域はすこぶる廣範圍にわたり、明に近接する諸國がそれ〴〵固有の譯館を有してゐたと異なり、すこぶる國際的普遍的な役割を果したことが知られるのである。

註

1 アラビヤ數字は東洋文庫本「來文」、ローマ數字は內閣文庫本「表文」の序列を示す。等號（＝）で結んだものは、どくわづかな文字の出入をのぞき內容的には全然同一なるものである。等號を以て結ばず孤立せるものはもちろん他に同樣のものがないことを示すものである。

1・2・3・4・II・III・IV・5＝XIII・6＝XIV・7＝XV・8・9＝I・10＝27＝VII・11＝21＝28＝VIII・12＝29＝VI・13＝XII・14・15＝V・16＝25＝30・17＝IX＝XVI・18＝26・19・20・22＝X・23＝XI・24・XVII

2 神田教授「上掲論文」(史林十二ノ四、頁十四)、この議は新貴の「戒菴文集」に見えてゐるが「增定館則」題簽類には收めてないといふ。
3 同上頁十四。

5

からした廣範圍の國際的役割を演じてゐた回回館の用語は、いかなる種類の言語であらうか。從來これを波斯語とし(Pelliot, Ross 等)、Ouigour と譯し(Douglas)、Arabic とし(Giles)、或はまた Arabo-Persian とした(Hirth)のであるが、結論的に申せば波斯語と稱して差支ない樣に思ふ。もちろんこの波斯語といふのは、新波斯語或は新イラン語ともいはれるものである。此の新波斯語といふのは周知のごとく、國粹的國語淨化運動が行はれたにも拘らず、アラビヤ語の影響を顯著にうけ、特に文語に於てさうであつて、文字のごときもアラビヤ語の字母二十八字を導入し、それにペルシャ語に必要な四個の字母を添加したものであるが故に、Hirth 氏のごとく、これを Arabo-Persian と申しても大過はなからうけれども、しかし以上のごときアラビヤ的要素があるにも拘らず、その根本は依然として波斯的なものである點、新波斯語に相違ないから、單に Persian として理解しても差支ないのである。

さて私はいまかかる性質を有する「回回館譯語」の語釋に手をそめたのであるが、參考に供した書は、現に回回館譯語を包含する華夷譯語全部に及ぶこと能はず、わづかに乙種本に於ては東洋文庫本明鈔本一本、丙種本に於ては阿波國本及び靜嘉堂本の二本であつた。兩種夫々の異本とこれら三本との校合は、未だその機會と時間とをもたぬので、後に之を讓つた。(補註)丙種本の中、淺井氏によると、(1)ロンドン本の回回館譯語には安南譯語とともに卷首に部門總目次があるといふが、阿波國本・靜嘉堂本には見えぬ。今日見ることの出來る丙種回回館譯語の五本(補註)は石田教授の說かれたごとく、部分的には別系統と思

はれる證據もあるが[3]、概ね同系統と解してよからう。さすれば、各本の相違は、語句の出入・文字の誤寫脱落等、大局的に見れば甚しく問題となるほどのものもないと思はれる。現に淺井氏によるとロンドン本と阿波國本・靜嘉堂本との間には甚しき差はないと云はれ、同氏が試みられた日本譯語の校合の結果を見ると、後の二本と稻葉本との間に、誤寫とみとめられる異字はあるが總語句數においては、靜嘉堂本が一語少ないのみである。この狀況を推して回回館譯語に及ぼしてもさまで無謀ではあるまい（もつともこの譯語では後に述べる樣に、阿波國本と靜嘉堂本との間にかなり語句數が違ふ）。ハノイ本とこれらとの比較は具體的にはまだなされて居らぬ。乙種諸本の華夷譯語に至つては、その語彙に對しても、來文に對しても、これまでに異本の內容的校合のごときは殆ど全くなされてゐない樣であるから、さうした勞作は今後にまさに行はるべきことである。本稿ではかくの如く、乙種に於ても丙種に於てもその全部に涉つて校合を行つた上で語釋を進めた譯ではないけれども、今後の行論に於ては東洋文庫本を乙種回回館譯語もしくは單に乙本といひ、序列をいふ場合には乙10のごとくよび、阿波國本（靜嘉堂本をもふくめて）を丙種回回館譯語もしくは單に丙本といひ、序列をいふ場合には丙10のごとくよぶこととする。而して本稿では乙種回回館譯語の中、語彙卽ち「雜字」の部分だけの語釋をば、丙種のそれと相對比しながら試みて行かうとするのである。乙本の「來文」の內部に立入つての考察は本稿では之を割愛した。

乙本雜字は、他の乙種各譯語の「雜字」と同じく、外國文字と、その漢字の音譯と、その語意の漢譯と、の三段式に記されてゐる。卽ちその體裁は次の樣式で、原則としては一頁每に四字收められてゐる。ただし通用門の六語（漢譯語の有・無・異・同・是・非）には原字が附してない。（補註に記した巴里アジヤ協會本には此等六語にも原字が附してある。）

آسمان　ماه

天　月

阿思媽恩　媽　黑

آفتاب　ستاره

日　星

阿夫他卜　洗他　勒

丙種回回館譯語は、他のこの種各譯語と同樣、原字は記してなく、漢譯と原字の漢字標音とが二段に記されてある。すなはち次の如くである。

天　阿思媽

雲　阿卜兒

雷　勒阿得

雨　把郎

靜嘉堂本の標音には、「天　阿思媽（アスマア）」、「雲　阿卜兒（アボルウ）」、「雷　勒阿得（ラアテ）」、「雨把郎（バアラン）」の樣に標音文字にふり假名がほどこしてある。しかしこれはもとより原語の原音とは無關係に附けられたものであつて、毫も參考に値しない。

乙丙兩種本の語釋に當つては、音譯に用ゐられた漢字はどの地方の音によつたものかをきはめることも必要であらう。乙・丙ともに明末期に近い時代の所產であるから、その時代の支那のある地方の漢字音によつて寫したものに相違ないから、まづその漢字音を調査すべきであるかもしれぬが、しかしまた反對に、音の明かな回回語から逆に標音文字の音を推測することも不可能ではない。本稿では回回館譯語の標音の所屬すべき支那方言音が何であるかを追究するに興味を有してゐないが、結果的に見れば、入聲音の存在は、標音上全く現はれて居らず、且つ北京音がもつとも優勢であるとだけは斷言出來る樣である。しかし之に對するより精細な調査も亦後日に割愛せらるべきである。

註

1 淺井氏上揭論文（上揭書頁五―六）。

2 同上參照。淺井氏は滿剌加譯語に於て、ロンドン本と阿波國本・靜嘉堂本とは非常な差があることを指摘され、阿波國本・

靜嘉堂本及び稻葉氏本の三本が同一系統であるといはれる。

6

乙種囘囘館譯語の雜字部はおよそ十八門に分れ、總語句數は七七七である。また丙種囘囘館譯語は門を分つこと十七、總語句數は六七四語（阿波國本による）である。靜嘉堂本は總語句數に於て六五五語であり、阿波國本より少きこと十九語である。靜嘉堂本に存して阿波國本に見えぬといふ語句はない。從つて靜嘉堂本に見えぬ十九語を阿波國本により補へば、書寫の際の異字はあつても原語句は完全に一致するわけである。いま乙丙兩書の部門排列と各部門の語句數とを示すと次の樣である。丙本の部に於て括弧を附した數字は靜嘉堂本のそれを示し、語順を示した番號は阿波國本のそれであつて靜嘉堂本のそれは特に記す必要を認めないので省略した。なほ阿波國本・靜嘉堂本と共に、丙種本に屬する稻葉氏本を參照し得なかつたことは、頗る遺憾に堪へぬ所であるが、これは近く調査する機會を得て、比較校合を行ひたいと思つてゐる（補註參照）。

乙種囘囘館雜字

		自	至	語句
一	天文門	一	四〇	四〇
二	地理門	四一	九六	五六
三	時令門	九七	一三七	四一
四	人物門	一三八	二〇二	六五
五	人事門	二〇三	三〇〇	九八
六	身體門	三〇一	三五〇	五〇
七	宮室門	三五一	三七五	二五
八	鳥獸門	三七六	四二四	四九
九	花木門	四二五	四六六	四二
一〇	器用門	四六七	五一六	五〇
一一	衣服門	五一七	五四二	二六
一二	飲食門	五四三	五七五	三三
一三	珍寶門	五七六	五九三	一八
一四	聲色門	五九四	六一〇	一七

一五　文史門　六一一—六二七　一七
一六　方隅門　六二八—六五一　二四
一七　數目門　六五二—六六九　一八
一八　通用門　六七〇—七七七　一〇八

丙種回回館譯語

一　天文門　自一—至二七　二七語句
二　地理門　二八—八一　五四
三　時令門　八二—一二一　四〇（三九）
四　花木門　一二二—一九六　七五
五　鳥獸門　一九七—二五六　六〇
六　宮室門　二五七—二七二　一六
七　器用門　二七三—三五三　八一（六七）
八　人物門　三五四—三九五　四二（四一）
九　人事門　三九六—四五五　六〇（五七）
一〇　身體門　四五六—四七九　二四
一一　衣服門　四八〇—五〇九　三〇
一二　飲食門　五一〇—五四二　三三
一三　珍寶門　五四三—五六〇　一八
一四　文史門　五六一—五七〇　一〇
一五　聲色門　五七一—五八三　一三
一六　數目門　五八四—六一一　二八
一七　通用門　六一二—六七四　六三

本稿に於ては兩種語譯を合同して語釋を試みた關係上、右の排列をいづれか一方變更せざるを得なかつた。よつて吾人は部門の排列は乙種本に從ひ、各部門内に於ても、出來得べくんば乙種本の排列を基準としたが、乙種本の部門に入れるよりも丙種本の分類に加へた方がよいと思はれる場合は、丙種本を基準においた場合が數例ある。元來右に明かなごとく兩種本の部門排列は順序を異にし、また各部門内に於ける語の順序も異なつて居り、且つ乙本人事門にある語句が丙本では時令門に入れられてあつたり、乙本方隅門のものが丙本通用門に加へられてあつたり、特に人事門・通用門の語句や器用門・衣服

門・文史門の語句等に於ては、兩種本の分類にかなり混雜を來してゐるため、いま乙種本を基準にすると、丙種本の本來の排列は完全に破壞されてしまふけれどもやむを得ざるものがある。從つて語釋に先立つては、本稿に用ゐた新しい排列順と乙丙兩種本舊來の排列順とを對比しておく必要が起つた。よつてその處置をも講じておいた。

なほ乙・丙兩種本に於て、漢譯を異にして居ても原語を等しくするもの、原語を異にしてゐても漢譯を同じくするもの、これらは原語も、漢譯もともに等しい語句と同樣に取扱ひ、それ等はともに同一番號下に收めて比較に便ならしめておいた。從つて次に示す新排列番號と語句の數とは必ずしも一致せず、後者が若干その總數に於て多いことを注意しておいていただきたい。左に掲げた新排列の表に於て前記と同じ體裁にしなかつたのはそのためである。

一　天文門　No. 1—No. 49
二　地理門　No. 50—No. 123（但し No. 118 は a, b の二項がある）
三　時令門　No. 124—No. 185
四　人物門　No. 186—No. 264
五　人事門　No. 265—No. 388
六　身體門　No. 389—No. 443
七　宮室門　No. 444—No. 470
八　鳥獸門　No. 471—No. 553
九　花木門　No. 554—No. 639
一〇　器用門　No. 640—No. 733（但し No. 719 は a, b の二項がある）
一一　衣服門　No. 734—No. 779
一二　飲食門　No. 780—No. 822
一三　珍寶門　No. 823—No. 846
一四　聲色門　No. 847—No. 866
一五　文史門　No. 867—No. 889
一六　方隅門　No. 890—No. 913
一七　數目門　No. 914—No. 943
一八　通用門　No. 942—No. 1063

さきにものべた如く、總語句數は上記一〇六五條よりも更に若干增加する筈であるが、それは全體で七〇語句に達するものの樣である。從つて總語句數は一一二五を數くるわけである。この排列を詳しく知るに便するために掲げたのが、次の新排列順と乙丙兩種本の舊排列順との對照表である。申すまでもなく、表中に乙10のごとく見えるのは、もと乙本のNo. 10であつたもの、丙20のごとく見えるのは、もと丙本のNo. 20に序列されてあつたことを意味するものである。

〔天　文　門〕

No. 1	乙	1.	丙 1	No. 2	乙	2.	丙 5
No. 3	乙	3.	丙 6	No. 4	乙	4.	丙 7
No. 5	乙	5.	丙 2	No. 6	乙	6.	丙 8
No. 7	乙	7.	丙 4	No. 8	乙	8.	丙 10
No. 9	乙	9.	丙 9	No. 10	乙	10.	丙 12
No. 11	乙	11.	丙 3	No. 12	乙	12.	丙 14
No. 13	乙	13.	丙 15	No. 14	乙	14.	
No. 15	乙	15.	丙 16	No. 16	乙	16.	丙 11
No. 17	乙	17.	丙 24	No. 18	乙	18.	丙 13
No. 19	乙	19.		No. 20	乙	20.	
No. 21	乙	21.		No. 22	乙	22.	
No. 23	乙	23.		No. 24	乙	24.	
No 25	乙	25.		No. 26	乙	26.	
No. 27	乙	27.		No. 28	乙	28.	
No. 29	乙	29.		No. 30	乙	30.	
No. 31	乙	31.		No. 32	乙	32.	
No 33	乙	33.	丙 18	No. 34	乙	34.	丙 19
No. 35	乙	35.		No. 36	乙	36.	
No. 37	乙	37.		No. 38	乙	38.	
No. 39	乙	39.		No. 40	乙	40.	
No. 41			丙 17	No. 42			丙 20
No 43			丙 21	No. 44			丙 22
No. 45			丙 23	No. 46			丙 24
No 47			丙 25	No. 48			丙 26
No. 49			丙 27				

〔地　理　門〕

No. 50	乙	41.	丙 45	No. 51	乙	42.	丙 48
No. 52	乙	43.	丙 44 丙 50	No. 53	乙	44.	丙 49

No. 54 乙 45. 丙 29
No. 55 乙 46. 丙 28
No. 56 乙 47. 丙 46
No. 57 乙 48. 丙 51
No. 58 乙 49. 丙 78
No. 59 乙 50.
No. 60 乙 51.
No. 61 乙 52.
No. 62 乙 53. 丙 34
No. 63 乙 54. 丙 35
No. 64 乙 55. 丙 30
No. 65 乙 56. 丙 43 丙 71
No. 66 乙 57.
No. 67 乙 58. 丙 56
No. 68 乙 59. 丙 47
No. 69 乙 60. 丙 36
No. 70 乙 61. 丙 32
No. 71 乙 62. 丙 33
No. 72 乙 63. 丙 41
No. 73 乙 64. 丙 40
No. 74 乙 65. 丙 59
No. 75 乙 66. 丙 54
No. 76 乙 67. 丙 57
No. 77 乙 68.
No. 78 乙 69.
No. 79 乙 70.
No. 80 乙 71. 丙 55
No. 81 乙 72.
No. 82 乙 73.
No. 83 乙 74. 丙 53
No. 84 乙 75. 丙 31
No. 85 乙 76. 丙 75
No. 86 乙 77. 丙 42
No. 87 乙 78.
No. 88 乙 79.
No. 89 乙 80. 丙 57
No. 90 乙 81.
No. 91 乙 82.
No. 92 乙 83. 丙 63
No. 93 乙 84. 丙 64
No. 94 乙 85. 丙 73
No. 95 乙 86.
No. 96 乙 87.
No. 97 乙 88. 丙 271
No. 98 乙 89.
No. 99 乙 90.
No. 100 乙 91.
No. 101 乙 92.
No. 102 乙 93.
No. 103 乙 94.
No. 104 乙 95.
No. 105 乙 96.
No. 106 丙 37
No. 107 丙 39
No. 108 丙 58
No. 109 丙 60
No. 110 丙 61
No. 111 丙 62
No. 112 丙 65
No. 113 丙 66
No. 114 丙 67
No. 115 丙 68
No. 116 丙 69
No. 117 丙 70
No. 118a 丙 72
No. 118b 丙 74
No. 119 丙 76
No. 120 丙 77
No. 121 丙 79
No. 122 丙 80
No. 123 丙 81

〔時　令　門〕

No 124 乙 97. 丙 87
No. 125 乙 98.
No. 126 乙 99. 丙 88
No. 127 乙 100. 丙 86
No. 128 乙 101. 丙 82
No. 129 乙 102. 丙 83
No. 130 乙 103. 丙 84
No. 131 乙 104. 丙 85
No. 132 乙 105. 丙 90
No. 133 乙 106. 丙 91
No. 134 乙 107. 丙 107
No. 135 乙 108.

No. 136	乙 109.	丙 95	No. 137	乙 110.	丙 94 丙 96
No. 138	乙 111.		No. 139	乙 112.	
No. 140	乙 113.		No. 141	乙 114.	
No. 142	乙 115.		No. 143	乙 116.	
No. 144	乙 117.		No. 145	乙 118.	
No. 146	乙 119.		No. 147	乙 120.	
No. 148	乙 121.		No. 149	乙 122.	
No. 150	乙 123.		No. 151	乙 124.	
No. 152	乙 125.		No. 153	乙 126.	
No. 154	乙 127.		No. 155	乙 128.	
No. 156	乙 129.		No. 157	乙 130.	
No. 158	乙 131.	丙 99	No. 159	乙 132.	丙 101
No. 160	乙 133.	丙 103	No. 161	乙 134.	
No. 162	乙 135.		No. 163	乙 136.	
No. 164	乙 137.	丙 115	No. 165		丙 89
No. 166		丙 92	No. 167		丙 93
No. 168		丙 97	No. 169		丙 100
No. 170		丙 102	No. 171		丙 104
No. 172		丙 105	No. 173		丙 106
No. 174		丙 108	No. 175		丙 109
No. 176		丙 110	No. 177		丙 111
No. 178		丙 112	No. 179		丙 113

No. 180	丙 114		No. 181	丙 116
No. 182	丙 117		No. 183	丙 118
No. 184	丙 119		No. 185	丙 120

〔人　物　門〕

No. 186	乙 138.	丙 354 丙 392	No. 187	乙 139.	丙 384
No. 188	乙 140.		No. 189	乙 141.	
No. 190	乙 142.	丙 356	No. 191	乙 143.	丙 357
No. 192	乙 144.	丙 387	No. 193	乙 145.	丙 358
No. 194	乙 146.		No. 195	乙 147.	丙 361
No. 196	乙 148.	丙 362	No. 197	乙 149.	丙 371
No. 198	乙 150.	丙 366	No. 199	乙 151.	丙 367
No. 200	乙 152.	丙 374	No. 201	乙 153.	丙 373
No. 202	乙 154.	丙 376	No. 203	乙 155.	丙 377
No. 204	乙 156.		No. 205	乙 157.	
No. 2 6	乙 158.		No. 207	乙 159.	
No. 208	乙 160.		No. 209	乙 161.	
No. 210	乙 162.		No. 211	乙 163.	
No. 212	乙 164.		No. 213	乙 165.	丙 438
No. 214	乙 166.		No. 215	乙 167.	
No 216	乙 168.		No. 217	乙 169.	
No. 218	乙 170.		No. 219	乙 171.	

No. 220 乙 172.
No. 221 乙 173. 丙 370
No. 222 乙 174. 丙 360
No. 223 乙 175. 丙 359
No. 224 乙 176. 丙 363
No. 225 丙 364
No. 226 乙 177.
No. 227 乙 178. 丙 365
No. 228 乙 179.
No. 229 乙 180. 丙 389
No. 230 乙 181.
No. 231 乙 182.
No. 232 乙 183. 丙 375
No. 233 乙 184. 丙 378
No. 234 乙 185. 丙 379
No. 235 乙 186. 丙 380
No. 236 乙 740. 丙 381
No. 237 乙 187. 丙 390
No. 238 乙 188.
No 239 乙 189.
No. 240 乙 190.
No. 241 乙 191.
No. 242 乙 192.
No. 243 乙 193.
No. 244 乙 194.
No. 245 乙 195.
No. 246 乙 196.
No 247 乙 197.
No. 248 乙 198.
No. 249 乙 199.
No. 250 乙 200.
No. 251 乙 201.
No. 252 乙 202.
No. 253 丙 355
No 254 丙 368
No. 255 丙 369
No. 256 丙 372
No. 257 丙 382
No. 258 丙 383
No. 259 丙 385
No. 260 丙 386
No. 261 丙 388
No. 262 丙 393
No. 263 乙 229. 丙 394
No. 264 乙 231. 丙 395

〔人　事　門〕

No. 265 乙 203.
No. 266 乙 204. 丙 121
No. 267 乙 205. 丙 426
No. 268 乙 206.
No. 269 乙 207. 丙 434
No. 270 乙 208. 丙 433
No. 271 乙 210. 丙 670
No. 272 乙 211. 丙 398
No. 273 乙 212. 丙 399
No. 274 乙 213. 丙 408
No. 275 乙 214. 丙 419 丙 667
No. 276 乙 215.
No. 277 乙 216.
No. 278 乙 217.
No. 279 乙 218.
No. 280 乙 219.
No. 281 乙 220.
No. 282 乙 221.
No. 283 乙 222. 丙 444
No. 284 乙 223.
No. 285 乙 224. 丙 443
No. 286 乙 225. 丙 406
No. 287 乙 226. 丙 424
No. 288 乙 227.
No. 289 乙 228.
No. 290 乙 230.
No. 291 乙 232.
No. 292 乙 233.
No. 293 乙 234.
No. 294 乙 235.
No. 295 乙 236.
No. 296 乙 237.
No. 297 乙 238.
No. 298 乙 239.
No. 299 乙 240.
No. 300 乙 241.
No. 301 乙 242.
No. 302 乙 243. 丙 427

No. 303 乙 244.
No. 304 乙 245.
No. 305 乙 246. 丙 642
No. 306 乙 247. 丙 643
No. 307 乙 248.
No. 308 乙 249.
No. 309 乙 250.
No. 310 乙 251
No. 311 乙 252.
No. 312 乙 253.
No. 313 乙 254.
No. 314 乙 255.
No. 315 乙 256. 丙 396
No. 316 乙 257. 丙 397
No. 317 乙 258.
No. 318 乙 259.
No. 319 乙 260.
No. 320 乙 261.
No. 321 乙 262.
No. 322 乙 263.
No. 323 乙 264.
No. 324 乙 265.
No. 325 乙 266.
No. 326 乙 267.
No. 327 乙 268. 丙 407
No. 328 乙 269.
No. 329 乙 270.
No. 330 乙 271.
No. 331 乙 272.
No. 332 乙 273.
No. 333 乙 274.
No. 334 乙 275.
No. 335 乙 276.
No. 336 乙 277. 丙 420
No. 337 乙 278.
No. 338 乙 779.
No. 339 乙 280.
No. 340 乙 281.
No. 341 乙 282.
No. 342 乙 283. 丙 454
No. 343 乙 284.
No. 344 乙 285.
No. 345 乙 286.
No. 346 乙 287.

No. 347 乙 288. 丙 433
No. 348 乙 289.
No. 349 乙 290. 丙 439
No. 350 乙 291.
No. 351 乙 292.
No. 352 乙 293.
No. 353 乙 294.
No. 354 乙 295.
No. 355 乙 296.
No 356 乙 297.
No. 357 乙 298.
No. 358 乙 299.
No. 359 乙 300.
No. 360 丙 400
No. 361 丙 401
No. 362 丙 402
No. 363 丙 403
No. 364 丙 404
No. 365 丙 405
No. 366 丙 409
No. 367 丙 410
No. 368 丙 413
No. 369 丙 414
No. 370 丙 415
No. 371 丙 416
No. 372 丙 418
No. 373 丙 421
No. 374 丙 429
No. 375 丙 431
No. 376 丙 436
No. 377 丙 440
No. 378 丙 442
No. 379 丙 445
No. 380 丙 446
No. 381 丙 447
No. 382 丙 448
No. 383 丙 449
No. 384 丙 450
No. 385 丙 451
No. 386 丙 452
No. 387 丙 453
No. 388 丙 455

〔身　體　門〕

No. 389　乙 301. 丙 456
No. 390　乙 302. 丙 464
No. 391　乙 303. 丙 467
No. 392　乙 304. 丙 468
No. 393　乙 305. 丙 458
No. 394　乙 306. 丙 457
No. 395　乙 307. 丙 459
No. 396　乙 308. 丙 460
No. 397　乙 309. 丙 463
No. 398　乙 310. 丙 461
No. 399　乙 311.
No. 400　乙 312. 丙 473
No. 401　丙 477
No. 402　丙 479
No. 403　乙 315.
No. 404　乙 316.
No. 405　乙 317.
No. 406　乙 318.
No. 407　乙 319.
No. 408　乙 320.
No. 409　乙 321. 丙 417
No. 410　乙 322.
No. 411　乙 323.
No. 412　乙 324.
No. 413　乙 325.
No. 414　乙 326.
No. 415　乙 327.
No. 416　乙 328.
No. 417　乙 329.
No. 418　乙 330.
No. 419　乙 331.
No. 420　乙 332. 丙 472
No. 421　乙 333. 丙 466
No. 422　乙 334.
No. 423　乙 335.
No. 424　乙 336. 丙 471
No. 425　乙 337.
No. 426　乙 338.
No. 427　乙 339.
No. 428　乙 340.
No. 429　乙 341.
No. 430　乙 342. 丙 469
No. 431　乙 343.
No. 432　乙 344. 丙 465
No. 433　乙 345.
No. 434　乙 346.
No. 435　乙 347.
No. 436　乙 348. 丙 470
No. 437　乙 349.
No. 438　乙 350.
No. 439　丙 462
No. 440　丙 474
No. 441　丙 475
No. 442　丙 476
No. 443　丙 478

〔宮　室　門〕

No. 444　乙 351.
No. 445　乙 352.
No. 446　乙 353. 丙 258
No. 447　乙 354.
No. 448　乙 355. 丙 260
No. 449　乙 356. 丙 259
No. 450　乙 357.
No. 451　乙 358. 丙 257
No. 452　乙 359.
No. 453　乙 360. 丙 261
No. 454　乙 361. 丙 265
No. 455　乙 362. 丙 264
No. 456　乙 363. 丙 263
No. 457　乙 364.
No. 458　乙 365. 丙 272
No. 459　乙 366. 丙 262
No. 460　乙 367. 丙 38
No. 461　乙 368.
No. 462　乙 369.
No. 463　乙 320.
No. 464　乙 371.
No. 465　乙 372.
No. 466　乙 373.
No. 467　乙 374. 丙 266 丙 268

No. 468 乙 375. 丙 270　　No. 469 丙 267

No. 470 丙 269

〔鳥 獸 門〕

No. 471 乙 376. 丙 197　　No. 472 乙 377. 丙 198

No. 473 乙 378. 丙 199　　No. 474 乙 379. 丙 200

No. 475 乙 380. 丙 216　　No. 476 乙 381. 丙 209

No. 477 乙 382. 丙 210　　No. 478 乙 383. 丙 211

No. 479 乙 384. 丙 224　　No. 480 乙 385. 丙 221

No. 481 乙 286. 丙 225　　No. 482 乙 387. 丙 226

No. 483 乙 388. 丙 203　　No. 484 乙 389. 丙 208

No. 485 乙 390. 丙 214　　No. 486 乙 391. 丙 215

No. 487 乙 392.　　No. 488 乙 393. 丙 227

No. 489 乙 394. 丙 205　　No. 490 乙 395. 丙 204

No. 491 乙 396.　　No. 492 乙 397.

No. 493 乙 398. 丙 219　　No. 494 乙 400. 丙 217

No. 495 乙 401. 丙 218　　No. 496 乙 402.

No. 497 乙 403.　　No. 498 乙 404.

No. 499 乙 405.　　No. 500 乙 406.

No. 501 乙 407.　　No. 502 乙 408.

No. 503 乙 409.　　No. 504 乙 410.

No. 505 乙 411.　　No. 506 乙 412.

No. 507 乙 413.　　No. 508 乙 414.

No. 509 乙 415.　　No 510 乙 416.

No. 511 乙 417. 丙 233　　No. 512 乙 418. 丙 232

No. 513 乙 419.　　No. 514 乙 420. 丙 234

No. 515 乙 421.　　No. 516 乙 422.

No. 517 乙 423.　　No. 518 乙 424.

No. 519 丙 201　　No. 520 丙 202

No. 521 丙 206　　No. 522 丙 207

No. 523 丙 212　　No. 524 丙 213

No. 525 丙 220　　No. 526 丙 222

No. 527 丙 223　　No. 528 丙 228

No. 529 丙 229　　No. 530 丙 230

No. 531 丙 231　　No. 532 丙 235

No. 533 丙 236　　No. 534 丙 237

No. 535 丙 238　　No. 536 丙 239

No. 537 丙 240　　No. 538 丙 241

No. 539 丙 242　　No. 540 丙 243

No. 541 丙 244　　No. 542 丙 245

No. 543 丙 246　　No. 544 丙 247

No. 545 丙 248　　No. 546 丙 249

No. 547 丙 250　　No. 548 丙 251

No. 549 丙 252　　No. 550 丙 253

No. 551　丙 254　　No. 552　丙 255

No. 553　丙 256

〔花　木　門〕

No. 554　乙 425. 丙 142　　No. 555　乙 426. 丙 143

No. 556　乙 427.　　No. 557　乙 428. 丙 181

No. 558　乙 429. 丙 182　　No. 559　乙 430.

No. 560　乙 431. 丙 144　　No. 561　乙 432. 丙 145

No. 562　乙 433. 丙 141　　No. 563　乙 434. 丙 158

No. 564　乙 435. 丙 163　　No. 565　乙 436. 丙 159

No. 566　乙 437. 丙 160　　No. 567　乙 438. 丙 162

No. 568　乙 439. 丙 161　　No. 569　丙 440. 丙 172

No. 570　乙 441.　　No. 571　乙 442.

No. 572　乙 443.　　No. 573　乙 444.

No. 574　乙 445. 丙 147　　No. 575　乙 446. 丙 169 丙 175

No. 576　乙 447. 丙 151　　No. 577　乙 448. 丙 150

No. 578　乙 449. 丙 152　　No. 579　乙 450. 丙 153

No 580　乙 451.　　No. 581　乙 452. 丙 156

No 582　乙 453.　　No. 583　乙 454. 丙 157

No. 584　乙 455　　No. 585　乙 456.

No. 586　乙 457. 丙 154　　No. 587　乙 458. 丙 184

No. 588　乙 459. 丙 185　　No. 589　乙 460.

No. 590　乙 461. 丙 183　　No. 591　乙 462.

No. 592　乙 463.　　No. 593　乙 464. 丙 164

No. 594　乙 465.　　No. 595　乙 466. 丙 192

No. 596　丙 122　　No. 597　丙 123

No. 598　乙 399. 丙 124　　No. 599　丙 125

No. 600　丙 126　　No. 601　丙 127

No. 602　丙 128　　No. 603　丙 129

No. 604　丙 130　　No. 605　丙 131

No. 606　丙 132　　No. 607　丙 133

No. 608　丙 134　　No. 609　丙 135

No 610　丙 136　　No. 611　丙 137

No. 612　丙 138　　No. 613　丙 139

No. 614　丙 140　　No 615　丙 146

No. 616　丙 149　　No. 617　丙 165

No. 618　丙 166　　No. 619　丙 167

No. 620　丙 168　　No. 621　丙 170

No. 622　丙 171　　No. 623　丙 173

No. 624　丙 174　　No. 625　丙 176

No. 626　丙 177　　No. 627　丙 178

No. 628　丙 179　　No 629　丙 180

No. 630　丙 186　　No. 631　丙 187

No. 632　丙 188　　No. 633　丙 189

No. 634 丙 190　No. 635 丙 191

No. 636 丙 192　No. 637 丙 194

No. 638 丙 195　No. 639 丙 196

〔器 用 門〕

No. 640 乙 467. 丙 277　No. 641 乙 468. 丙 278

No. 642 乙 469. 丙 281　No. 643 乙 470. 丙 282

No. 644 乙 471. 丙 279　No. 645 乙 472. 丙 280

No. 646 乙 473. 丙 290　No. 647 乙 474. 丙 289

No. 648 乙 475. 丙 308　No. 649 乙 476. 丙 306

No. 650 乙 477. 丙 310　No. 651 乙 478.

No. 652 乙 480.　No. 653 乙 481.

No. 654 乙 482.　No. 655 乙 483. 丙 146

No. 656 乙 484.　No. 657 乙 485. 丙 275

No. 658 乙 486. 丙 329　No. 659 乙 487. 丙 311

No. 660 乙 488.　No. 661 乙 489. 丙 296

No. 662 乙 490. 丙 327　No. 663 乙 491.

No. 664 乙 492. 丙 273　No. 665 乙 493.

No. 666 乙 494. 丙 494　No. 667 乙 495. 丙 291

No. 668 乙 496.　No. 669 乙 497.

No. 670 乙 498.　No. 671 乙 499.

No. 672 乙 500.　No. 673 乙 501.

No. 674 乙 502. 丙 316　No. 675 乙 503.

No. 676 乙 504. 丙 295　No. 677 乙 505.

No. 678 乙 506.　No. 679 乙 507. 丙 300

No. 680 乙 508. 丙 301　No. 681 乙 509. 丙 313

No. 682 乙 510. 丙 330　No. 683 乙 511 丙 312

No. 684 乙 512.　No 685 乙 513.

No. 686 乙 514.　No. 687 乙 515.

No. 688 乙 516. 丙 339　No. 689 丙 274

No. 690 丙 276　No. 691 丙 283

No. 692 丙 284　No. 693 丙 285

No. 694 丙 286　No 695 丙 287

No. 696 丙 288　No. 697 丙 292

No. 698 丙 293　No. 699 丙 294

No. 700 丙 297　No. 701 丙 298

No. 702 丙 299　No. 703 丙 302

No. 704 丙 303　No. 705 丙 304

No. 706 丙 305　No. 707 丙 307

No. 708 丙 309　No. 709 丙 314

No. 710 丙 315　No. 711 丙 317

No. 712 丙 318　No 713 {a 丙 319, b 丙 320}

No. 714 丙 321　No. 715 丙 322

No. 716 丙 335　No. 717 丙 336

No. 718 丙 337　No. 719 丙 338
No. 720 丙 340　No. 721 丙 341
No. 722 丙 342　No. 723 丙 343
No. 724 丙 344　No. 725 丙 345
No. 726 丙 346　No. 727 丙 347
No. 728 丙 348　No. 729 丙 349
No. 730 丙 350　No. 731 丙 351
No. 732 丙 352　No. 733 丙 353

〔衣　服　門〕

No. 734 乙 517.　No. 735 乙 518.
No. 736 乙 519. 丙 488　No. 737 乙 520. 丙 491
No. 738 乙 521. 丙 483　No. 739 乙 522. 丙 482
No. 740 乙 523.　No. 741 乙 524.
No. 742 乙 525. 丙 480　No. 743 乙 526. 丙 481
No. 744 乙 527.　No. 745 乙 528. 丙 323
No 746 乙 529. 丙 502.　No. 747 乙 530.
No. 748 乙 531.　No. 749 乙 532.
No. 750 乙 533.　No. 751 乙 534. 丙 490
No. 752 乙 535.　No. 753 乙 536. 丙 328
No. 754 乙 537. 丙 324　No. 755 乙 538. 丙 325
No. 756 乙 539. 丙 326　No 757 乙 540.

No. 758 乙 541. 丙 492　No. 759 乙 542.
No. 760 丙 484　No. 761 丙 485
No. 762 丙 486　No. 763 丙 487
No. 764 丙 489　No. 765 丙 493
No. 766 丙 495　No. 767 丙 496
No. 768 丙 497　No. 769 丙 498
No. 770 丙 499　No. 771 丙 500
No. 772 丙 501　No. 773 丙 502
No. 774 丙 504　No. 775 丙 505
No. 776 丙 506　No. 777 丙 507
No. 778 丙 508　No. 779 丙 509

〔飲　食　門〕

No. 780 乙 543. 丙 155　No. 781 乙 544. 丙 513
No. 782 乙 545. 丙 511　No. 783 乙 546. 丙 517
No. 784 乙 547. 丙 518　No. 785 乙 548. 丙 523
No. 786 乙 549. 丙 512　No. 787 乙 550. 丙 524
No. 788 乙 551. 丙 516　No. 789 乙 552. 丙 521
No. 790 乙 553.　No. 791 乙 554. 丙 510
No. 792 乙 555. 丙 536　No. 793 乙 556.
No. 794 乙 557. 丙 535　No. 795 乙 558. 丙 533
No. 796 乙 559. 丙 532　No. 797 乙 560. 丙 530

No. 798 乙 561. 丙 528　　No. 799 乙 562. 丙 527
No. 800 乙 563. 丙 526　　No. 801 乙 564.
No. 802 乙 565. 丙 525　　No. 803 乙 566.
No. 804 乙 567. 丙 531　　No. 805 乙 568.
No. 806 乙 569.　　No. 807 乙 570. 丙 522
No. 808 乙 571.　　No. 809 乙 572.
No. 810 乙 573. 丙 520　　No. 811 乙 574.
No. 812 乙 575.　　No. 813 丙 514
No. 814 丙 515　　No. 815 丙 519
No. 816 丙 529　　No. 817 丙 534
No. 818 丙 537　　No. 819 丙 538
No. 820 丙 539　　No. 821 丙 540
No. 822 丙 542

〔珍　寶　門〕

No. 823 乙 576. 丙 543　　No. 824 乙 577. 丙 544
No. 825 乙 578. 丙 555　　No. 826 乙 579. 丙 549
No. 827 乙 580. 丙 545　　No. 828 乙 581. 丙 546
No. 829 乙 582.　　No. 830 乙 583.
No. 831 乙 584. 丙 548　　No. 832 乙 585. 丙 547
No. 833 乙 586.　　No. 834 乙 587.
No. 835 乙 588. 丙 550　　No. 836 乙 589. 丙 552

No. 837 乙 590. 丙 553　　No. 838 乙 591. 丙 551
No. 839 乙 592.　　No. 840 乙 593.
No. 841 乙 554.　　No. 842 丙 556
No. 843 丙 557　　No. 844 丙 558
No. 845 丙 559　　No. 846 丙 560

〔聲　色　門〕

No. 847 乙 594. 丙 572　　No. 848 乙 595. 丙 573
No. 849 乙 596. 丙 574　　No. 850 乙 597. 丙 571
No. 851 乙 598. 丙 575　　No. 852 乙 599. 丙 577
No. 853 乙 600. 丙 578　　No 854 乙 601. 丙 576
No. 855 乙 602.　　No. 856 乙 603. 丙 582
No. 857 乙 604.　　No. 858 乙 605. 丙 581
No. 859 乙 606.　　No. 860 乙 607.
No. 861 乙 608.　　No. 862 乙 609.
No. 863 乙 610.　　No. 864 丙 579
No. 865 丙 580　　No. 866 丙 583

〔文　史　門〕

No. 867 乙 611. 丙 561　　No. 868 乙 612. 丙 562
No. 869 乙 613. 丙 563　　No. 870 乙 614. 丙 564
No. 871 乙 615. 丙 331　　No. 872 乙 616. 丙 332

No. 873 乙 617. 丙 333　　No. 874 乙 618. 丙 334
No. 875 乙 619.　　No. 876 乙 620.
No. 877 乙 621.　　No. 878 乙 622.
No. 879 乙 623.　　No. 880 乙 624.
No. 881 乙 625.　　No. 882 乙 626.
No. 883 乙 627.　　No. 884 丙 565
No. 885 丙 566　　No. 8 6 乙 479. 丙 567
No. 887 丙 568　　No. 888 丙 569
No. 889 丙 570

〔方　隅　門〕

No. 890 乙 628. 丙 626　　No. 891 乙 629. 丙 628
No. 892 乙 630. 丙 627　　No. 893 乙 631. 丙 629
No. 894 乙 632. 丙 624　　No. 895 乙 633. 丙 625
No. 896 乙 634. 丙 612　　No. 897 乙 635. 丙 613
No. 898 乙 636. 丙 614　　No. 899 乙 637. 丙 615
No. 900 乙 638. 丙 617　　No. 901 乙 618. 丙 618
No. 902 乙 640. 丙 616　　No. 903 乙 641.
No. 904 乙 642.　　No. 905 乙 643.
No. 906 乙 644. 丙 636　　No. 907 乙 645. 丙 637
No. 908 乙 646.　　No. 909 乙 647.
No. 910 乙 648.　　No. 911 乙 649.

No. 912 乙 650. 丙 663　　No. 913 乙 651. 丙 664

〔數　目　門〕

No. 914 乙 652. 丙 584　　No. 915 乙 653. 丙 585
No. 916 乙 654. 丙 586　　No. 917 乙 655. 丙 587
No. 918 乙 656. 丙 588　　No. 919 乙 657. 丙 589
No. 920 乙 658. 丙 590　　No. 921 乙 659. 丙 591
No. 922 乙 660. 丙 592　　No. 923 乙 661. 丙 593
No. 924 丙 594　　No. 925 丙 595
No. 926 丙 596　　No. 927 丙 597
No. 928 丙 598　　No. 929 丙 599
No. 930 丙 600　　No. 931 丙 601
No. 932 乙 662. 丙 602　　No. 933 乙 663. 丙 603
No. 934 乙 664. 丙 604　　No. 935 乙 665. 丙 609
No. 936 乙 665. 丙 610　　No. 937 乙 748. 丙 611
No 938 乙 692. 丙 695　　No. 939 乙 693. 丙 606
No. 940 丙 607　　No. 941 乙 668. 丙 608
No 942 乙 667.　　No. 943 乙 669.

〔通　用　門〕

No. 944 乙 670. 丙 411　　No. 945 乙 671. 丙 412
No. 946 乙 672. 乙 652　　No. 947 乙 673. 丙 653

No. 948 乙 674. 丙 648
No. 949 乙 675. 丙 649
No. 950 乙 676. 丙 620
No. 951 乙 677. 丙 619
No. 952 乙 678. 丙 645
No. 953 乙 679. 丙 644
No. 954 乙 680. 丙 655
No. 955 乙 681. 丙 654
No. 956 乙 682.
No. 957 乙 683.
No. 958 乙 684.
No. 959 乙 685.
No. 960 乙 686.
No. 961 乙 687. 丙 638
No. 962 乙 688.
No. 963 乙 689.
No. 964 乙 690. 丙 630
No. 965 乙 691. 丙 631
No. 966 乙 694.
No. 967 乙 696. 丙 655
No. 968 乙 697. 丙 651
No. 969 乙 698.
No. 970 乙 699.
No. 971 乙 700.
No. 972 乙 701.
No. 973 乙 702 丙 422
No. 974 乙 703. 丙 423
No. 975 乙 704.
No. 976 乙 705.
No. 977 乙 706. 丙 633
No. 978 乙 707. 丙 632
No. 979 乙 708.
No. 980 乙 709.
No. 981 乙 710.
No. 982 乙 711.
No 983 乙 712.
No. 984 乙 713. 丙 430
No. 985 乙 714.
No. 986 乙 715.
No. 987 乙 716.
No. 988 乙 717.
No. 989 乙 718.
No. 990 乙 719.
No. 991 乙 720.

No. 992 乙 721. 丙 647
No. 993 乙 722.
No. 994 乙 723. 丙 425
No. 995 乙 724. 丙 621
No. 996 乙 725. 丙 622
No. 997 乙 726. 丙 623
No. 998 乙 727.
No. 999 乙 728.
No 1000 乙 729.
No.1001 乙 730.
No.1002 乙 731. 丙 435
No.1003 乙 732.
No.1004 乙 733.
No.1005 乙 734.
No.1006 乙 735.
No.1007 乙 736.
No.1008 乙 737.
No.1009 乙 738.
No.1010 乙 739.
No.1011 乙 741.
No.1012 乙 742.
No.1013 乙 743.
No.1014 乙 744.
No.1015 乙 745.
No.1016 乙 746
No.1017 乙 747. 丙 650
No.1018 乙 749.
No.1019 乙 750.
No.1020 乙 751.
No.1021 乙 752.
No.1022 乙 753.
No.1023 乙 754.
No.1024 乙 755.
No.1025 乙 756.
No.1026 乙 757. 丙 541
No.1027 乙 758.
No.1028 乙 759.
No.1029 乙 760.
No.1030 乙 761.
No.1031 乙 762.
No.1032 乙 763.
No.1033 乙 764.
No.1034 乙 765.
No.1035 乙 766. 丙 657

No.1036	乙 767.		No.1037	乙 768.	
No.1038	乙 769.		No.1039	乙 770.	
No.1040	乙 771.		No.1041	乙 772.	
No.1042	乙 773.		No.0143	乙 774.	
No.1044	乙 775.	丙 441	No.1045	乙 776.	
No.1046	乙 777.	丙 437 丙 666	No.1047		丙 634
No.1048		丙 635	No.1049		丙 639
No.1050		丙 640	No.1051		丙 641
No.1052		丙 646	No.1053		丙 657
No.1054		丙 658	No.1055		丙 659
No.1056		丙 661	No.1057		丙 662
No.1058		丙 668	No.1059		丙 669
No.1060		丙 671	No.1061		丙 672
No.1062		丙 673	No.1063		丙 674

備考　No. 118 及び No. 713 は a, b 二項としたから正しくは 1065 條となる筈である。

〔以　上〕

7

本稿をなすに當つて參考に供した辭書の主なるものは次のものである。

J. Richardson; Dictionary Persian, Arabic and English, 2 vols., London, 1806.

J. T. Zenker; Dictionaire turc-arabe-persan (türkisch-arabisch-persisches Handwörterbuch), 2 vols, Leipzig, 1867.

F. Steingass; A Students' Arabic English Dictionary, London, 1887.

F. Steingass; A Complehensive Persian English Dictionary, London, 1892, 1st edit., 1930, 2nd edit.

なほ文法書としては主として D. C. Phillott; Higher Persian Grammar for the use of the Calcutta University, Calcutta, 1919. を座右に置いた。

つぎに本稿では印刷の不便を省いたために、出來るだけ原字を用ゐることをさけ、原字はローマ字に音譯轉寫して記した。ペルシャ・アラビヤ字母のローマ字轉寫の樣式はまだ一定せず、前記の各辭書に於ても一致してゐない。本稿では最も簡明と思はれる

Steingass 及び Phillott の樣式に則つたが、この二者に於て kh, gh のごとくしたものに於ては、單に kh, gh として下線を省いた。

排列	字母	字母名	音譯轉寫	排列	字母	字母名	音譯轉寫
1	ا	Alif	a (註 1)	13	ز	Zā, Ze	z
2	ب	Bā, Be	b	14	ژ	Zhe	zh
3	پ	Pe	p	15	س	Sīn	s
4	ت	Tā, Te	t	16	ش	Shīn	sh
5	ث	Ṡā, Ṡe	ṡ	17	ص	Ṣād	ṣ
6	ج	Jīm	j	18	ض	Ẓād	ẓ
7	چ	Che	ch	19	ط	Ṭā	ṭ
8	ح	Ḥā, Ḥe	ḥ	20	ظ	Ẓā	ẓ
9	خ	Khā, Khe	kh	21	ع	ʻAyn	ʻ
10	د	Dāl	d	22	غ	Ghayn	gh
11	ذ	Ẕāl	ẕ	23	ف	Fā, Fe	f
12	ر	Rā, Re	r	24	ق	Qāf	q
25	ك	Kāf	k	29	ن	Nūn	n (註 2)
26	گ	Gāf	g	30	و	Waw	w (註 3)
27	ل	Lām	l	31	ه	Hā, Ḥe	h
28	م	Mīm	m	32	ی	Yā, Ye	y (註 4)

註

1: 實際の場合はこの a のほか、ā, i, u とうつされ、a, y 接續の場合は ī または ai となり、a, w 接續の場合は ū または au となる。

2: b, p, m の前では ṃ とうつす。

3: 實際の場合は w のほか v 及び ẓammah 音とつゞいて ū 又は o となる。本稿では v とうつしたものは稀で、さういふ場合もおほむね w を以てした。kh に後續して無音となる場合には w としるす。

4: y のほか kasrah 音に續いて ī 又は e とうつされ、また註 1 の a, y の如き場合は、i といふ音になることもある。

乙本の原字をすべてこの方式にならつて轉寫した。右の中、Pe, Che, Zhe, Gāf の四字母はペルシヤ字母で、他の二十八字は元來アラビヤ字母であることは周知のことであらう。しかし乙本の原字に於

て注意すべきことは、Gaf は或る場合を除けばすべて Kaf を以てかかれてあることである。この特例といふのは、乙 330「項、革兒丹」に對して ﻛﻜﻚ とかかれてある如きで、今日では Gaf は ﮔ とかかれ ﮓ のごとき形の文字は用ゐられぬが、その種の Gaf があつたことは珍しいことである。Gaf を用うべき場合に Kaf を用ゐることは、前記 Richardson の辭書の序文に從へば、ふるくは殆どすべてさうであつたらしいから、異とするに足らぬ。また乙本では Pe, Che, Zhe を用うべき場合に、しば〳〵 Be, Jim, Ze を用ゐてゐるが、かかることも古くは稀な現象ではなかつたことが、同じ著者の序文で知られるのであつて、これらの混同は、本稿に於て標音に從つて判別する可能性があつて、乙本の原字に盲從する危險は少ない。しかし、これらの場合のみならず、乙本の原字には明かに誤綴とみとめられるものがかなり多數ある。また波斯語では語尾にあるhはこれを發音する場合と發音せぬ場合とがあるが、このh字を脱してゐる場合も少なくない。本稿に於て、原字を伴つてゐる乙本をも語釋する必要を感じたのは一にはこの種の過誤をただすにもあつたのである。乙・丙兩本の校訂は各字句毎に行つたが、初出の標音の例としてその條下に例示する際には校訂濟の正しい字形を以てし、若し原書に脱字があつた場合には挿入した文字に括弧〔 〕を施し、原書に衍字を含んで、之を省かねばならぬ際には〔 ? 〕を附加してその區別を明かにしておいた。

本稿に於ける原語の發音は前記の諸辭典その他を相參照しつゝ、できるだけそれらに典據をもとめて標準とすべき音をとり、それと標音のあらはす音とを比較對照した。而して兩者合致せざるときは、乙丙兩本の標音によつて生ずべき音を訛音と見なした。なほ原語のローマ字音譯にあたつては、發音し

ない語尾のhはそれに括弧を附して(h)としてその存在を明示し、發音する語尾のhは單にそのまま寫して、兩者の區別を明かにした次第である。(未完)

〔附　記〕

本稿を草するに當つては、東洋文庫・靜嘉堂文庫及び內閣文庫に於ては貴重なる所藏書の閱覽の便宜を與へられ、書誌學的解說については石田敎授に負ふ所多く、華夷譯語研究の動向に關しては小倉博士・淺井惠倫氏に敎示を蒙り、語釋にあたつては市村博士・和田博士より示唆を與へられた所があつた。これらの方々に對しては衷心感謝の意を表する次第である。

〔補　註〕

本文(頁一〇〇參照)に於て、先學の報告に從つて、丙種の一本稻葉氏本にも回回館譯語があると述べておいたが、これには稍〻疑がある。稿を終へた後、稻葉氏本に據つた內藤博士本に從つて謄寫したといふ京大文學部所藏鈔本を檢討する機會を得たが、同寫本は八冊八種の譯語より成り、占城・西番・回回・女直・百夷の五種の譯語は存しない(舊報告によると、稻葉氏本の缺本は滿剌加・女直二館譯語のみとある。)。依て吾人は原本たる稻葉氏本にも當面の譯語はなかつたかと疑つて居る。なほ乙種は東洋文庫本のみに限る筈であつたが、我が國に數部あるといふ康熙鈔本巴里アジャ協會本の寫眞版の一を京大文學部で閱覽したので、本論に於ては、この書をも參考に供しようと思ふ。巴里本は漢語譯總語句數に於て、東洋文庫本に一致するが、巴里本の冒頭には、「翰林院提督四譯館太常寺少卿陳履平訂」とある如く、訂正の筆が加へられたと見えて、外國語の綴字や、漢字音譯には誤謬は依然として發見されるが、しかし東洋本庫本に比し、改善された迹が窺はれる。ここに新たに兩種本の異本を閱讀するを得たことに對し、京大文學部圖書室並びに藤枝晃氏に感謝する次第である。